

バプテストの教会論： 共にキリストの心を識る¹

カレン・E. スミス
金丸英子 (訳)

講師紹介

カレン・E. スミス (Karen E. Smith) はイギリス・バプテスト史の専門家であり、同分野の第一人者 B. R. ホワイトのもと、オックスフォード大学で1987年に博士号 (DPhil) を取得した研究者である。スミスはこれに先立ち、アメリカのマーサー大学 (BA) とサザンバプテスト神学校 (MDiv) でも研鑽を積んでいる。1970年代後半から、米国南部バプテスト連盟内の根本主義勢力による連盟政治と教育機関のコントロールが顕著となったが、その影響は南部バプテスト連盟傘下の6つの神学校に直接及んだ。そのような中、南部バプテスト連盟創立以前に開校していたサザンバプテスト神学校は最後の牙城であったが、結局ここでも根本主義勢力が神学校理事会の多数派となった。現在のサザンバプテスト神学校校長アル・モラー (Al Mohler) の校長就任 (1993年) はその象徴である。

1 この翻訳は、2020年10月8日にオンラインで開催された全英バプテスト歴史協会 (Baptist Historical Society) 主催のセミナーでカレン・E. スミス (Karen E. Smith) が行った主題講演「我らバプテストのストーリーを紐解く (Uncovering Our Baptist Story)」(2020年10月8日) のほぼ全訳である。その中で唯一、イギリスの現在の社会構造や社会保障に関する部分は割愛している。理由は、講演内容に直接関係しないため、むしろ訳出することで論旨の輪郭がはやけることを懸念したことと、訳者がその部分を噛み砕いて訳出する力を備えていなかったからである。そのため「ほぼ全訳」と記した。なお本原稿の論集掲載についてはスミスから了解をとっている。

根本主義者が主導権を握った神学校理事会は、連盟の神学的方向に馴染まない神学校教員を「連盟の役に立たない神学校教員」と呼んで憚らなかったため、その影響は神学校志願者を始め、卒業生たちの進路にも現れ始めた。多くの教員が学問の自由と良心の自由を求めて神学校を去り、一般大学に移ったり、教育者ではなく牧師になる道を選ぶ教員たちが続出した。スミスもその中のひとりで、教育と研究の自由のために英国に渡った。私事で恐縮だが、私は南部バプテストの根本主義者と穏健派の対立がキャンパスで渦を巻いていた時期にサザンバプテスト神学校に在籍しており、政治手腕や学歴の面でバプテスト根本主義者の脅威を肌で知るひとりである。当時のサザンバプテスト神学校の教員の中で、歴史神学の教員は総じて根本主義勢力による連盟のコントロールに危機感を持ち、執筆や講演を通して声を上げる教員の割合が高かった印象がある。バプテストの理想と歴史の中で受け継がれてきた財産 (heritage) に誠実であろうとしたためであろう。スミスはその時期のバプテスト史の教員であり、その最中に我ら神学生にバプテスト史を講じた。

その後、スミスは英国ウェールズのサウスウェールズバプテスト大学とカーディフ大学で教会史とスピリチュアリティの講座を担当し (1991～2018年)、あわせてウェールズのオーチャードプレースバプテスト教会の牧師も務めた (1993～2018年)。現在、カーディフ大学名誉上席リサーチフェローの任にあり、全英バプテスト歴史協会の国際学術誌『バプテストクォーターリー』 (*The Baptist Quarterly*) の共同編集責任者のひとりである。バプテスト史とスピリチュアリティの分野を中心に、多くの執筆や講演を行なっている。

〔訳者解説〕 契約共同体 (Covenanted Community) としての教会

スミスは以下の講演で「契約」という表現を多く用い、契約共同体としてのバプテスト教会を論じている。スミスによれば、初期イングランドのバプテストにとって教会は、そこに集う者たち自身の決意による任意の集合体ではなく、まずもって神に呼び集められた共同体 (gathered community) であっ

た。神はこの群れに「人々を共に『集わしめ』、互いを契約の関係性へと呼び出された」(1頁)。この契約は、神と人との間の契約であると同時に、人と人との間の契約でもあるという重層の特徴を備え、その内容は旧約聖書の十戒と新約聖書でイエス・キリストが「最も大切な戒め」として教えた命令とを反映している。神の愛に根拠を持つ戒めである。さらにスミスは、バプテスト教会の中心はこの契約の関係性にかかっているとまで述べている(3頁)。

ただ、ここで留意すべきは、訳出された「契約」の英語は“covenant”で、雇用や賃貸などの関係内容を表わす“contract”のそれではないということである。つまり、どちらもラテン語に語源を持つが、前者は実存的有りようとしての「誓約」や「盟約」の意味合いを帯びる一方、後者は「共に」に「引き寄せる、引張る」という意味合いを含む語が用いられ、箇条的な内容合意による「契約、協定」を意味するものとなる。そして、「契約」と訳されている言葉は、聖書の場合もスミスの場合もいずれも前者の“covenant”のそれであって、神と人との間の、また人と人との間の誓約的性格にその特質がある。スミスの講演を的確に読み取るには、この点の前理解が重要になろう。

したがって、教会を契約共同体と言う場合、そこでの契約を後者の“contract”と取り違えると、教会が巷の企業や組織と変わらぬものになりかねない。社会生活での契約関係のように、個々の条件を満たすことが教会員に要求されるようになる。そして、それをチェックする細かな規則を整えることが教会の本務であるかのように捉えられてしまう危険性である。そこでは、以下の講演でスミスが述べるようなバプテストの教会理解が失われる。すなわち、神によって呼び出され、教会に集められた教会員。その教会員が愛において「互いを心に留め、『互いの重荷を負う』だけでなく、『霊的・肉体的な弱さも共に負う』ことを約束し」(4頁)、神の前に共に歩み続ける。そのような信仰の群れとしての教会というバプテストの教会理解が、そこでは歪められてしまうからである。

ちなみに、契約共同体としての教会を以上のような意味合いで捉えることは自身の教会理解として欧米のバプテストの間では通説となっているので、論考として別途紹介する必要があるかもしれない。

バプテストの教会論：共にキリストの心を識る

カレン・E. スミス

共にキリストの道^しを識ることに努めると言うとき、イギリスのバプテストにとってそれは各個の教会としてそうすることはもとより、さらにはより広く、まさに地方や全国レベルの群れとしてそうすることをも意味している。そして、そこには幾つか、依拠する重要な神学的テーマがある。このセミナーではすでに2回、1) 良心の自由の強調と2) 他の信仰者たちとの共なる分かち合いの重要性というタイトルでセッションが持たれたが、そこでもそれらについて触れられた。要は、キリスト者は単独の信仰者としてあるのではなく、キリストを通して神御自身との関係性に、神によって呼び出された存在であるということ。また、人間相互の関係性へと、同様に神によって呼び出された存在であるということである。「集められた信仰の共同体」として共に集うということが、17世紀イングランドのバプテストたちにとっては神への応答と理解されていた。神御自身が人々を共に「集わしめ」、互いを契約の関係性へと呼び出されたと信じたのである。

35年前、ある論文集が刊行された。『愛に結ばれてーバプテストの生活と宣教の契約的基盤 (Bound to Love, The Covenant Basis of Baptist Life and Mission)』と題された論文集で、寄稿したバプテスト派の神学者たちは読者に、契約によって結ばれた教会生活の再考を促した。そして、「契約に言及する神学は十字架と復活の救い主、教会共同体の唯一の創始者、『交わり』『平安の秩序』『完成』、そして『権威』という言葉に極めて新しい意味づけを行う中心的存在としてのイエス・キリストの正当性を認めている」と強調した²。ここでは、いかなる理由で契約の関係性がバプテスト教会の中心であるべきかという神学的、歴史的、牧会的理由を繰り返す時間はない。しかしながら、初期のバプテストたちが聖書から示された理解を自らの共同体の基盤に据え、キリス

2 Keith W. Clements, 'The Covenant and Community' in *Bound to Love: The Covenant Basis of Baptist Life and Mission* (London: The Baptist Union, 1985), p. 60.

トを信ずる者として、私たちが神の愛にあって相互に結び付けられているとしたことは重要で、忘れてはならない。すなわち、私たちは自分自身のことを、組織の単なる一部だとか、あるいは何らかの人間的な同意や賛意によって各個教会の教会員となっているとか、同じようにして各個教会を超えた広い組織や連合体に連なっていると、そのように考えるべきではないと言っているのである。〔現在の英国バプテスト研究のリーダー格のオックスフォード大学教授〕ポール・フィデス（Paul Fiddes）は事あるごとに次のように語って、私たちにそれを喚起している。曰く、「神が契約の取り交わしの主導権を握っている」³。言い換えれば、私たちは自分たちの人間的な決断だけで交わりに入るのではない。そうではなく、神に呼び出されることによって初めて、他者との交わりに入るのである。

1686年の信仰告白は、各個教会の教会員について、次のように告白している。

神に呼び出された聖人たちは（信仰の告白と実際の歩みにおいて、またそれらを通して）キリストの呼びかけに従順なることを見える形で表わし、証しとする。そして、キリストの命じられるところに従い、共に歩むことに喜んで同意する。そのようにして、神の御心みこころに基づき、福音の教えに従うことを告白して、自分自身を主に献げ、また互いに献げ合うのである⁴。

会衆〔教会〕は契約の関係性において神に呼び出されているので、神によって可視的な信仰共同体として呼び集められていることを強調する契約への同意を文字にしたのである。共にあることによって、彼らは教会員としての責任とその恩典の両方を誓ったのである。忘れてならないのは、契約文は入会して共に結ばれるために要求される詳細な規則の一覧でもなければ、信条として見なされてもいなかったということである。その反対に、教会員は互いを心に留め、「互いの重荷を負う」だけではなく、「霊的・肉体的な弱さ

3 Paul Fiddes, 'Covenant -- Old and New', in *Bound to Love*, p. 10.

4 'Second London Confession, 1689', in *Baptist Confessions of Faith*, ed. W. L. Lumpkin (Valley Forge: Judson Press, 1969/1983), p. 286.

も共に負う」ことを約束し、そのように受け入れ合ったのである⁵。教会のいろいろな会議は定期的に行われたが、それはキリストの命を分かち合う方法として理解されていたばかりでなく、共にキリストの心を見極め、識るための方法でもあった。このような教会の諸会議は、共に集い、共に祈り、神の霊が教会に語ろうとするところを共に聴き、判断する時として理解された。スティーブン・ホームズ (Stephen R. Holmes, スコットランド・セントアンドリュース大学教授) が正しくも指摘したように、「教会の会議では人間が主導権を握ってそれを治め、統治するのではなく、(略) そこで出席者全員がなすべきことは自分たちの思いや好みを優先し、それを主張するのではなくて、たとえ多数票を得られなくても、キリストの思いを共に聴き分け、共に識るということである」⁶。

確かなことは、初期のバプテストは教会の話し合いの場を財務に関する決定を行ったり、執事会や牧師の決定を承認するだけの単なる「事務会」とはしなかったということである。そうではなく、そこはキリストにある交わりの明白な表現の機会であった。その意味で、教会の会議の場では、あらゆる社会階層に属する人々、あらゆる能力を有する全教会員が協議や討議、決定に参加する対象とみなされた。主の晩餐がそうであるように、教会のあらゆる会議は社会的に認められた地位の有無に関係なく、すべての教会員が共に集う時であった。言うまでもなく、包括的であることの強調は事柄の是非を見分ける際の不可欠な原理である。誰もが互いに聴き合うために自由に集まり、互いの考えを共有する。そして、まさにそこにおいて、アーネスト・ペイン (E. A. Payne) も言うように、「活けるキリストの聖霊が己が民と共にいて、より十分なる真理の理解とさらにも聖なる命の道へと民を導き給うと信じる信仰」をバプテストは堅持したのだった⁷。言うまでもないことだが、こ

5 '1697 Covenant of Benjamin and Elias Keach' in Charles W. Deweese, *Baptist Church Covenants*, (Nashville: Broadman Press, 1990), p. 120.

6 Stephen R. Holmes, *Baptist Theology*, Doing Theology Series (London: T&T Clark, 2012), p. 102.

7 E. A. Payne, *The Fellowship of Believers, Baptist Thought and Practice Yesterday and Today* (London: Kingsgate Press, 1944), pp. 20-21.

こでの聖霊についての認識として、それが人々の間で「指導者」と目されている（また、自分自身をそのように自負している）者たちだけではなく、すべての信仰者の群れに対し、その間を自由に動いて働き、集う個々人に親しく自らを明らかにする存在と信じたことは重要な点と言えよう。

さらに言えば、キリストの心を求めることは教会の諸会議の場に限定されたことではなかった。礼拝もその時だったし、とりわけ神の言葉が取り次られる説教は、それを通して神の語りかけを聴き、キリストの導きを求める時として理解されていた。それゆえ、18世紀の賛美歌作家 アン・スティール (Anne Steele, 1717~1778) は、御言葉の中で「救い主の声を聴き」「救い主を認識する」と、そう表現したのである⁸。個人にとっても共同体にとっても、礼拝はキリストの心を共に聴き合い、識る時であった。もちろん、集められた教会全体に関わる個々の具体的判断については、キリストの臨在のもと、皆で共同して決定せねばならないのは当然である。

事態はどう変わったか

歴史から何を学び、今日に生かせるか

近年、教会全体（特に西欧世界の教会）が総じて直面している最大の挑戦の一つは、「ビジネスモデル」を軸にして教会形成を目指すべきとのプレッシャーである。ユージン・パターソン (Eugene Paterson) は『熟考の牧師 (Contemplative Pastor)』という自著で、時に「(企業のように) 教会を運営する」という考えに惹かれる牧師の心情について、次のように指摘している。曰く、「教会の運営」という考え方に心惹かれる時、牧師がそこで問うのは「何をしようか?」ということであり、「どのようにして、また事を進めるか?」ということである、と。そして一方、次のように述べてもいる。「魂の癒やし」を求める人々の側について言えば、その関心は「神はここ〔教会〕で何をしてくれてきたか?」「ここでの生活を振り返って、どんな恵みの跡を

8 Verses 1, 4, 6 Anne Steele, 'Father of Mercies' in *Baptist Praise and Worship* (Oxford, UK: Oxford University Press, 1991), p. 143.

見ることができるか？」ということであり、また「愛のどんな実際を、このグループの歩みの中に読み取ることができるか?」「神は具体的に何をして、この自分を元気にしてくれるのか?」ということである、と⁹。パターソンの言わんとするポイントは、当然ながら、神はすでにイニシアチブを取って、事に当たっているということである。であるから、働き給うその神と共に、それが何であれ、聖霊の御業と考えられる事柄に参与していくことが人間のなすべきことであると言うのである。

バプテストについて言えば、「ビジネスモデル」の採用は19世紀から20世紀初頭にかけて始まったもので、それが(21世紀の)現在、各個の教会や地方連合、教派組織にまで影響を与えていると論じてよかろう。時間の関係から、ここではディスカッションの口火として幾つかの例を挙げるに留めるが、次のような現状が認められる。

- 1) 牧師と執事は自分たちを教会の「指導者」と考え、教会の会議で話し合う前にすでに自分たちで結論を出し、教会員には報告がなされるだけという例が増えている。
- 2) 多くの場面で「いかに事を進めるか」が重視され、そのための目標設定が強調されている。また、すでに進行中の神の御業を識ろうとする時間を犠牲にしてでも、特定の目的や目標を達成することが優先されている。
- 3) ある場合には、地方連合の会議が、意志決定のプロセスに人々関わっていると実感できるようなものになっていない。反対に、「執行役員会」の如きところで決定がなされ、会議にはそれが報告されるだけである。信仰やその実践に関わる大切な問題を話し合うためにそこに集っているという感覚が会議のメンバーたちにほとんど見受けられないことも少なくない。
- 4) 全国レベルに至っては、「執行委員会」のどこにも属していても意見を表明できるような場所は、バプテストであるにもかかわらず、も

9 Eugene Peterson, *The Contemplative Pastor: Returning to the Art of Spiritual Direction* (Grand Rapids: Erdmanns, 1989), p. 61.

はやないように思われる。バプテストは運動体と言われることがあるが、そうあることによって、互いを結び付けているその契約的基盤を喪失してしまっていないだろうか。

〔略：イギリス固有の社会制度に関する一節のため〕

もしもこのまま「ビジネスモデル」を続けるとすれば、信仰共同体として共にキリストの心を識ろうとすることを私たちはもはやしなくなるのではないかと懸念するが、それは言いすぎだろうか。私はそうは思わないのである。それとも、私たちはすでにキリストの心を識っているとでも言うのだろうか。〔略：同前〕また、教会や地方連合、教派団体で「責任者、指導者」とみなされている、いくばくかの人たち。彼らだったら、「キリストの心」を識っていると言えるのか。

私が言いたいのは、契約を基盤とした生という考え方を、組織運営の方法や手段としてビジネスモデルに代えて用いるということではない。そうではなく、ビジネスモデルの無思慮な使用を止め、人々を呼び出して集め給う神によってこそ教会は教会となることを、共々いま一度、信じたいのである。契約を基盤とした生を、神が起こしてくださる。そうであれば、キリストにある私たちの繋がりというのは単に選択の事柄でもなければ、自身の組織化に便利な方策というでもない。むしろ、相互の共なる生を、神に対する応答として捉えるべきである。

共にキリストの心を聴き取って識るということは、決してたやすいプロセスではない。教会は群れとして共に集うところなので、キリストの御旨は通常、皆が揃って集い、交わりを共にするそのところで啓き示みむねされると考えられる。とはいえ、最初期のバプテストもそうであったように、聖霊の導きに関して教会員の一致が得られず、ついには道を分かつような時もないとはかぎらない。しかしながら、見解の相違から最終的に分裂に至るそのような時もある一方で、同時にまた、「共にキリストの心をたずねる」姿勢が当該問題についての見方を変えさせたり、意見を異にすることを受け入れさせたりす

ることもあることを忘れてはなるまい。さらには、たとえ考えが違ったにしても、それをもってキリストにある交わりが妨げられるようなことがあってはならないと、少なくともそのように導かれることもあることを覚えておきたい。その意味で想い起こされるのは、1780年に採択されたニューロードバプテスト教会の教会契約に記された素晴らしい一節である。〔同教会はオックスフォードにある歴史的な教会だが〕バプテスマの形式としてどのような形が適切か、当時、意見が分かれていた。そのことにきちんと言及しつつ、同契約文はしかし、引き続き「等しく同じ厚意と愛の中へと互いを受け入れ合うことに同意する」と約束の言葉を記している。以下の通りである。

我らの間には、信仰者たる両親の子どもとして、父・子・聖霊の^{みな}御名によって幼な子に滴礼を受けることをキリスト教の真正なバプテスマと確信している者たちがいる。だが、その一方でまた、キリスト教の真正なバプテスマは、自身の悔い改めと信仰と神の恵みの体験の告白に基づき、^{さんみいったい}三位一体の聖なる神の御名において、浸礼によって成人に執行されるものと信じる者たちもいる。こうした見解の相違はあるものの、我らはしかしながら、等しく同じ厚意と愛の中へと互いを受け入れ合うことに同意し、これを約束する。これは、なかならず、次のような理由による。すなわち、かかる見解の相違をもって、狭義には主の晩餐への陪餐を禁じる根拠も、また広義には教会の交わりへの参加を禁止する根拠も、神の言葉たる聖書の中にそれらのいずれをも見取ることができないからである。しかも、いずれの側の者たちをも主イエスは受け入れ、御自身のものでくださっているとしたら、我らもまた、そのようにすべきと考える¹⁰。

10 The covenant of New Road Baptist Church, Oxford

<http://www.newroadbaptistchurchoxford.co.uk/content/pages/documents/1312454439.pdf>,
consulted on 08 May 2015.